

## 詩篇 126 篇「礼拝の復興」

詩篇 126 篇のみことばに聞き、教会の礼拝が、また私たちそれぞれの礼拝が、復興することを祈り求めたいと思います。

### 1. 復興してくださったとき（:1~3）

1 節から 3 節では、主がかつて礼拝を復興してくださったことを思い起こしています。

1 節。シオンは主がご自分の住まいとされたところです（詩篇 132 : 13）。その聖所において主への礼拝が献げられるように主が定め、求められました。単にエルサレムの町が復興することではなく、主への礼拝を献げるための特定の場が整えられることを言っています(51:18~19)。

そのときには「私たちは夢を見ている者のようであった」ということですから、礼拝が復興するのに困難な状況であったということでしょう。しかし、実現しました。主が実現させてくださったのです。そのようにかつてあった主の恵みを思い起こしているのです。

私たち信仰者は、七日の内の一日を主を礼拝するために聖別し、安息日を覚えます。時間と場所を礼拝のために定めて、集まり、主との公の会見の場を持っています。主のあわれみによって私たちは変えられました。主が一人一人を礼拝者としてくださいました。私たちの礼拝を復興してくださったのです。

2 節。主への礼拝が回復するときに、主の民は喜びで満たされます。また、その喜びに満たされた主の民の姿は、周りの人々に証しとなりました。このことばは、他の詩篇にある諸国民の嘲りとは対照的です。「おまえの神はどこにいるのか」(42:3)とか、「彼には神の救いがない」(3:2)という嘲りが主の民に浴びせられました。しかしここでは、主の力強い御業が明らかにされ、主の民に対する主の大きな恵みが証しされました。

ですから、そのときには主の民に主への感謝と賛美があふれました。諸国の人々のことばを繰り返すようにして語っています。3 節。かつて主が礼拝を復興してくださったことを振り返ると、そこにあったのは喜びでした。「私たちは喜んだ」と結んでいます。主への信頼が表されています。

主への礼拝を献げることができるのは、私たちにとってもこのような大きな喜びです。

### 2 元どおりにしてください（:4~6）

かつて主が礼拝を復興してくださったことを思い起こしているのは、主の民の現実がそうではなかったからです。そのことは、この詩篇の後半から分かります。

4 節。「元どおりにしてください」は、1 節の「復興してくださったとき」と同じ動詞を使った、同じような表現になっています。かつて主が御業を行ってくださったように、再び御業を行ってくださることを求めて祈っています。

そして、祈り求めている主の御業を二つのイメージで語っています。一つは「ネゲブの流れ」ということです。ネゲブはユダの南部の乾燥した土地です。そこにはワジ、涸れ川と呼ばれる、雨の少ない季節には乾いてしまう川がいくつもあります。ところが、雨が多い季節には、その谷は水が勢よく流れるようになります。

そのような「ネゲブの流れ」に、主が与えてくださる回復の力をたとえています。涸れた谷に水が流れるように、劇的に変化させ、一気に豊かな恵みを与えることを、全能の主ならばできると信頼して祈り求めています。自分たちを取り巻く状況は困難で、自分たちは力をなくしているかもしれません。しかし、主はご自身の民を元どおりにしてくださることを信頼して、祈り求めるのです。

もう一つのイメージは農作業を行う農夫の姿の描写です。5~6 節。「ネゲブの流れ」のイメージでは、全く天からの恵みによることが示されています。主が一方向的に与えてくださる賜物です。それに対して、二番目のイメージでは、主の御業を願い求めるのですが、主の民にもなすべきことがあります。種を蒔くことです。

種を蒔くには「涙とともに」労苦する必要があります。でも、その労苦は無駄にはなりません。主が成長させてくださり、収穫できるようにしてくださるのです。実りを得るまでは長く待たなければなりません。主が喜びを与えてくださると信頼して、種を蒔き、なすべきことを行うのです。

また、6 節では出て行くことと帰って来ることが組み合わされて、その両方が強調されています。民が出て行

く必要があります。そこには涙が伴うようなこともあります。しかし、主の恵みの御業がなされ、喜びを与えられて帰って来ることができます。礼拝から出て行き、主の恵みをいただいて帰って来る信仰者の姿に重なります。

また、このみことばは伝道に適用されることがよくあります。みことばの種を蒔いていくことには涙が伴うことがあるでしょう。しかし、主がたましいの収穫を与えてくださるのです。

そして、伝道についてだけでなく、その他の信仰者の歩みにも適用することができます。「失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります。ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう」(ガラテヤ6:9-10)。

この詩篇を通して示されているのは、涙が喜びの叫びに変えられることです。2節で、以前の主の祝福を振り返って思い起こした「喜びの叫び」が、再び与えられることを求めて、5節6節で繰り返しています。

私たちの現実はしばしば、泣きながら涙とともに種を蒔くようなものです。しかし、私たち信仰者は絶望してはいけません。希望を失ってはいけません。やがて、ついには、喜び叫びながら収穫にあずかるという希望が与えられています。礼拝においても、宣教においても、そうです。主に信頼する人々の揺らぐことのない慰めがあるのです。

教会の礼拝も、一人一人の礼拝も、復興することを願っています。主が礼拝を復興してくださることを求めています。そして、「涙とともに種を蒔く」時であっても、やがて「喜び叫びながら刈り取る」ことができるようになる、主がそうさせてくださることを期待しつつ、今できることをしていきたいと教えられます。

礼拝においても、宣教においても、主が復興してくださることを信じて祈り求めつつ、教会として、また一人一人が、今できることに取り組んでいきましょう。